

図書館と私

星野 明子

図書館の思い出：小学校から現在に至る迄、多くの図書館にお世話になった。高校、大学では音楽書に夢中になり、視聴コーナーも充実していたので時間が空くと大学の図書館に通い詰っていた。その後ドイツに留学する頃、盛んに新全集の楽譜の校訂が行われていた。学生時代から版の違いをいろいろ見比べ検討する事が好きだったが、新全集が出てそれ迄良いとされてきたことが、リズムや音さえも大きく変わっていてショックを受けた覚えがある。ドイツでの生活当初は寮での仮住まいでピアノも無く、毎日朝から晩まで徒歩で十分程のバーデンヴェルテンベルグ州立図書館に通い詰めた。州立図書館も直ぐ近くでどちらも同じように落ち着く大好きな場所となった。当時は開架式スペースに様々な全集が並べであり、ワクワクしながら音符達と対話をしていたものだ。また拙いドイツ語ながら原書を読み解いていく楽しみもあり、二十代後半でちよつと背伸びをしながら「勉強するぞく！」という意欲が高まってくるのを今でも鮮明に覚えている。カフェテラスがあり昼食もそこで済ませ、運動不足解消のため近くの公園を一廻りして、また夕方まで過ごすというのがその頃の日課だった。大学が始まってこの州立図書館と州立図書館を最大限利用していた。ドイツでの生活の原点：いつも懐かしく思っていたが、州立図書館はつい最近二〇一一年秋に白いモダンなキューブ型建築として生まれ変わったそうだ。古く趣のある建物が街並と共に消えていく

のは残念で仕方がない。

十一年前に本学教員として勤め始め、歴史ある図書館を見て本当に嬉しくなった。居心地の良いゆったりしたスペースで、音楽書、楽譜、音楽関係資料は勿論のこと、分野を問わず多くの文献があり、それこそ宝の山。基礎ゼミで学生達と書庫ツアーに参加してこれだけの資料が整然と整理されているのを見て驚いた。資料を請求すると瞬間にその本が目の前に出てくるが、それは全て手作業で書庫の中から目的の文献を素早く揃えて下さる：本当に感動した。

先の版の違いについての続きで、語りかけてくる楽譜と無味乾燥な楽譜の違いについて一言。

自筆譜を見ていると作曲家の個性が見えてくる。几帳面な人、温かくゆつたりした譜面、苦勞して何度も書き直している部分、湧き出る音楽を書きながら進むように書き進めている箇所など、その楽譜から音楽が伝わってくる。出版楽譜も昔は丁寧に音符の長さによる間隔の差、視覚的にもその音楽の構造、色調が読み取れるようにレイアウトされていたが、最近はその手間をかけず、コンピュータで打ち込んだままのような楽譜に結構お目にかかる。ヘンレ版、ベーレンライター版等重要な版にそのような傾向が見られとても残念だ。国立音楽大学図書館には貴重な自筆譜ファクシミリ、マイクロフィルム等も沢山あるので、この身近な宝庫を大いに利用して自分の引き出しを増やして心豊かな演奏に繋げたい。